

# おばあさん

ある おひやくしようの おうちに、ことし

も リンゴが どっさり なりました。おひやくしようと おかみ

さんは、それを すっかり もいで、ゼリーやリンゴの おさけを  
どっさり つくりました。

すこしばかり のこった リンゴは いちばへ もってって う



ることになりました。よるおそく、おかみさんは、ねむい目をこすりながら、のこったリンゴのかずをかぞえました。ちようど四十よんじゆうありました。

あくるあさ早くはやおきて、リンゴを、一つひと、二つふたとまたかぞえながら、手かてごへ入いれました。すると、ゆうべは、たしか四十よんじゆうしかなかったのに、いまかぞえると四十よんじゆういち一あります。

「おや。」とおもって、もう一いちどかぞえなおしてみましたが、やっぱり四十よんじゆういち一です。

「じゃあ、ゆうべのが、まちがつっていたのかな。でも、一つひとつへったのではなし、まあ いいわ。」

おかみさんは そういつて わらって、手てかごを さげて、町まちのいちばへ出かけました。

いちばへ つきますと、そろそろ 町まちの人ひとたちが かいものにきました。おかみさんは、かごを かかえて つつ立たちながら、大おおきなこえを あげて「さあさあ、どなたも リンゴを おかいなさい。こんな大きな、いろつやの いいのが、一つひとつ 六ろくせん 二つで

十<sup>じゅう</sup>せん。」とよびかけました。すると、しばらくのあいだにど  
んどんうれて、しまいには三つ<sup>さん</sup>のこりしました。

おかみさんが、ふと、そののこったリンゴをよく見<sup>み</sup>ますと、  
中<sup>なか</sup>の一<sup>ひと</sup>つは、すこしかたち<sup>かたち</sup>が小<sup>ちい</sup>さい上<sup>うえ</sup>にいろが、へんに  
きいろっぽいのです。

「おかしいね。ゆうべかぞえたときには、こんないろのリンゴ  
はなかったけど。はてな。」とふしぎにおもって、そのリンゴ  
をちよいとゆびでさわってみますと、リンゴはいきなりピ

---

ヨコンと とび上<sup>あ</sup>がって かごから にげ出<sup>だ</sup>し、こ  
ろころころと 人ごみの 中<sup>なか</sup>へ かけこみまし  
た。おかみさんは、びっくりして、

「あらあらあら。つかまえてよう つかまえてよう。」  
と どなりたてました。

「なんだ なんだ。」

「リンゴですよ。」

「やあ、リンゴが はしる はしる。つかまえろ。わあっ。」と、人<sup>ひと</sup>



びとは おお 大さわぎをして おっかけて じきに つかまえました。

「どうも ありがとうございました。」と おかみさんは、みんなに おれいを 行って、そのリンゴを ポケットに しまいこみました。

「ほんとに、おかしな リンゴが あったものだ。こんなものは ひと 人には うれやしない。」

と、ひとり 一人の あか はなの あか 赤い おばあさんが、ちい 小さな て 手がごを さ げて やってきて、

「リンゴを みつ 三つ くだ 下さいな。」と いいました。

---

「あいにく、もう、二つしかふた ないですが。」と といいますと、おばあさんは こまったように、

「おやおや、三つみつ いるんだけど、どんなのでもいいから、もう一つひとつ ありませんか。」と います。

「じゃあ、これでも よかったら、おまけに さし上げあましょう。」と、おかみさんは、さっきの リンゴを ポケットから とり出だしました。

「だけど、気きをつけて いらっしやらないと、このリンゴは、ピ

---

ヨイト はね上<sup>あ</sup>がって にげ出<sup>だ</sup>して いきますよ。」

「あはは、まさかね。」と、おばあさんは 大よろこびで、三<sup>みつ</sup>つの リ  
ンゴを 手<sup>て</sup>かごに 入<sup>い</sup>れて、村<sup>むら</sup>へ かえつていきました。

町<sup>まち</sup>を 出<sup>で</sup>はずれて、ぼくじょうに そつた こみちを とことこ

かえりますと、ひつじかいの 男<sup>おとこ</sup>が さくの 中<sup>なか</sup>から、

「おばあさん、こんちは。」と こえを かけました。

「はい、こんちは。いいお天<sup>てん</sup>気で、けっこうですね。」

「どちらの、おかえり？」

---



「町まちで リンゴを かってきた ところです。」

「ゼリーを つくるんですか。」

「いいえ、そんなに たくさん かつたんじゃ ありません。やきリンゴにして たべるのです。」

「そりゃあ、ごちそうだね。だけど、やきリンゴに するには、よつぽど、つやのいいのでないと だめですよ。どら。ほほう。」と  
手てかごを のぞきこんで、

「おや、このリンゴは、へんに きいろつぽいね。こいつは、くさ

---

ってるよ、きつと。」

こういって ゆびを ふれようとする はずみに、リンゴは ピョ  
コンと ニメートルばかり とび上がりました。

「あらあらあら。」と、おばあさんは あわてて 手がごに うけと  
めました。

「なんて いたずらを するんです。人のものだと おもって な  
げ上げたりなんかして。下へ おちたら きずが つくじやありま  
せんか。」

---

「わたしは なんにも しましませんよ。リンゴが ひとりで と  
び上あがったんですよ、まったく。」

「ばかなことを いいなさんな。年としよりだと おもって、ばかにし  
て。」と、おばあさんは、ぷりぷりしながら いきました。

ぼくじょうの はての ところまで きますと、おばあさんの  
村むらのおてらの やねが ひかって 見みえ出だしました。おばあさんは、  
とても ぐたびれたので、すこし 休やすもうと おもって、みちばた  
の ハンの木きの 下したへ かごをおいて、

---

「や、どっかいしょ。」と、そのそばへ こしを 下ろおしました。と、そのひょうしに、リンゴは、ピヨコンと、ハンの木のき こずえよりも たかく とび上あがりました。

「あらあら。」と おばあさんは びっくりして、手てかごで うけとめました。

「まあ、なんて、おどろいた リンゴだろう。」  
こんどは、とび出ださないように、りょうで おさえつけて  
いました。

---

「こんな、やっかいな リンゴは、いつそ いまのうちに たべて やろう。」

こうおもって、りょうほうの おやゆびへ、ありったけの 力を  
こめて リンゴを 二つに わりました。

すると、中から 小さな きいろい 小とりが とび出して、う  
れしそうに、ばたばたと、おばあさんの ぐるりを とびまわりま  
した。おばあさんは 二ど びっくりして、目を ぱちぱちさせて  
見ていました。小とりは ハンの木の えだに とまって にんげ

んのおりのことばで　いいました。

「<sup>ピ</sup>イ<sup>ピ</sup>イ、<sup>ピ</sup>イ<sup>ピ</sup>イ、おばあさん、ありがとうございます。あたしは、わるい　まほうつかいに　つかまって、三年の　あいだ、いまの　リンゴの　中<sup>なか</sup>に　とじこめられていましたの。このおれいに、おばあさんが、こうしてほしいと　おおもいになることを、三つだけ　かなえて<sup>あ</sup>上げますから、こころのなかで　いって<sup>くだ</sup>下さい。さようなら。」と、いふなり、ぱつと　立<sup>た</sup>って　いってしまいました。「ほっほ。とうとう、リンゴ　一<sup>ひつ</sup>つ　そんを　したわよ。小<sup>こ</sup>とりの

---

くせに、人の<sup>ひと</sup>のぞみを かなえてやるなんて、大きな<sup>おお</sup>ことをい  
うものだ。はっは あてに しないで いましようよ。」

おばあさんは、すっかり つかれが 出<sup>で</sup>て ねむくなつてしまし  
た。

「すこし ここで ひるねをして いこうかな。この手<sup>て</sup>かごが、わ  
しが 入<sup>はい</sup>れるくらい 大き<sup>おお</sup>かったら この中<sup>なか</sup>に 入<sup>はい</sup>つて、ぐつすり  
ねむるのだが。あああ。」と あくびを しました。見<sup>み</sup>ると、手<sup>て</sup>かご  
は いつのまにか、おばあさんの からだが、らくらく 入<sup>はい</sup>る く

---

らいな 大きな おお かごに なっています。

「ほほう。」と おばあさんは、二つの ふた リンゴを とり出して だ 草 くさ の上 うえ に おいて、さっそく、その かごの なか 中へ 入りました。

「ああ、いい ねごちだ。それで、はねでも 入 はい った やわらか  
まくらでも あると、いいぶんは ないのだが。」と おもいながら  
目 め を つぶりますと、ぴよいと、いつのまにか あたまの した 下へ、  
はねの 入 はい った やわらかい まくらが ひとりでに 入 はい りこみま  
した。



おばあさんは 大よろこびで、うとりうとりと ねむりかけました。すると、ちかくにいた はちが ぶうんと やってきて、おばあさんの 赤あかいはなの まわりを ぶんぶん とびまわります。

「うるさいね。しっしっ。」と おばあさんは 手てを 上あげて おいのけました。おいのけても、また すぐ やってきて、ぶんぶん はなを つつつきます。おばあさんは、

「ちよっ、しつこい はちだね。」と、むっくり はんしんを おこして、こっぴどく おっぱらいました。

---

そのとき、ふと、空そらの まんなかに、ひるの お月つきさまが 白しろく  
かかっているのが見みえました。

「いつそのこと、あのお月つきさまの 中なかへ とんで行って、あすこ  
で 一ひんねむりして きたいね。おお うるさい はちだ、また き  
た。」と いう はずみに、かごは、おばあさんを のせたまま、ふ  
らふらふらと 空そらへ とび上あがりました。

「あら、まって まって。リンゴが あるわよ。あたしの リンゴ  
が。」と、どなりどなり しましたが、もう どうすることも でき

---

ませんでした。

草くさの 上うえに とりとりのこされた 二ふたつの りんごは、ゆうがたに、

ひつじかいが 見みつけて、ムシヤムシヤ たべてしまいました。お月つき

さまへ いった おばあさんは、とうとう いまだに かえつてき

ません。きつと いまでも お月つきさまの なかで、かごに 入はいった

まま、リンゴの ゆめでも 見みながら ぐうぐう ねむっているの

でしよう。

---